

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平9-81518

(43) 公開日 平成9年(1997)3月28日

(51) Int. Cl. ⁶

G06F 15/00

識別記号

330

庁内整理番号

F I

G06F 15/00

330

B

技術表示箇所

審査請求 未請求 請求項の数 2 O L (全9頁)

(21) 出願番号 特願平7-231159
(22) 出願日 平成7年(1995)9月8日

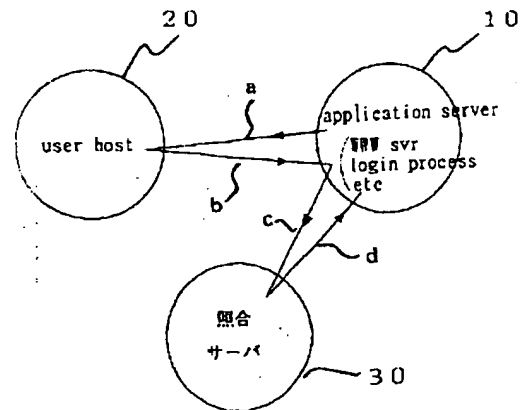
(71) 出願人 591210910
株式会社キャディックス
東京都世田谷区新町2丁目26番15号
(72) 発明者 田吹 隆明
東京都世田谷区新町2丁目26番15号 株式
会社キャディックス内
(74) 代理人 弁理士 吉田 研二 (外2名)

(54) 【発明の名称】 ネットワーク上の認証方法

(57) 【要約】

【課題】 ネットワーク上で利用者の認証を容易に行う方法を実現する。

【解決手段】 ユーザホスト20から送出されてきた認証データを、アプリケーションサーバ10は、照合サーバ30に送出する。照合サーバ30は、「正しい」認証データを予めデータベースに保持しており、送出されてきた認証データと、「正しい」認証データとを比較照合する。そして、この照合の結果がアプリケーションサーバ10に返送される。アプリケーションサーバ10はこの結果に基づき、利用者に認証を与える。この結果、アプリケーションサーバの構成が簡易化される。照合サーバ30は、複数のアプリケーションサーバ10から利用することができ、ネットワーク上の資源の運用の効率化を図ることができる。



【特許請求の範囲】

【請求項 1】 ネットワーク上のアプリケーションサーバが、そのアプリケーションの利用者の認証を行う認証方法において、

前記アプリケーションサーバが前記利用者からの認証データを受信する受信工程と、

前記受信工程において受信した認証データを、前記利用者の識別データと共に、照合サーバに送出する送出工程と、

前記照合サーバが、前記送出されてきた認証データが、前記送出されてきた識別データの利用者の認証データであるか否かを照合する照合工程と、

前記照合サーバが、照合結果を前記アプリケーションサーバに返送する照合結果返送工程と、

前記照合結果返送工程において返送された照合結果に基づいて、前記アプリケーションサーバが前記利用者が正当な利用者であるか否かを認証する認証工程と、

を含むことを特徴とするネットワーク上の認証方法。

【請求項 2】 ネットワーク上のアプリケーションサーバが、そのアプリケーションの利用者の認証を行う認証方法において、

前記アプリケーションサーバが、照合サーバに対し、前記利用者の識別データを送信して、前記利用者の正しい認証データをあらかじめ読み出しておくよう要求する照合準備要求工程と、

前記アプリケーションサーバが前記利用者からの認証データを受信する受信工程と、

前記受信工程において受信した認証データを、前記利用者の識別データと共に、照合サーバに送出する送出工程と、

前記照合サーバが、前記送出されてきた認証データが、前記送出されてきた識別データの利用者の認証データであるか否かを照合する照合工程と、

前記照合サーバが、照合結果を前記アプリケーションサーバに返送する照合結果返送工程と、

前記照合結果返送工程において返送された照合結果に基づいて、前記アプリケーションサーバが前記利用者が正当な利用者であるか否かを認証する認証工程と、

を含むことを特徴とするネットワーク上の認証方法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】 本発明は、アプリケーション利用者の認証を行う方法に関する。特に、ネットワーク上における利用者の認証に関する。

【0002】

【従来の技術】 銀行などのサービス業では、取引に際して、相手が本人であるか否かを確認すること、すなわち認証は極めて重要な問題である。これは、他人が本人になりすまして口座からお金を引き出したり、お金を振り込んでしまったりすることを防止するためであ

る。

【0003】 この認証のためには、古典的には例えば、運転免許証や、一定の身分証明書等を提出してもらい、本人であるか否かを確認している。近年、現金自動引き出し器等の発達により、磁気カードやパスワードなどによって、本人の認証を行う方法が広く採用されている。

【0004】 このような「認証」は、銀行以外でも必要とされる場合は多い。例えば、研究機関などにおいては、秘密漏洩を防止すべく、一定の区域へは許可された者のみ入場を許し、それ以外の者に対しては入場を制限する場合が多い。また、会員制クラブ等でも会員であることを何らかの方法で確認しなければならない。この研究機関や会員制クラブにおいても、上記磁気カードやパスワード、若しくは会員証等を用いることも好適である。しかし、磁気カードや会員証は紛失してしまう可能性があるし、また、パスワードも忘れてしまう可能性も決して小さくはない。そのため、本人を確認する方法として、指紋や、網膜パターン等のいわゆるバイオメトリックな物理量を認証のためのデータ（以下、認証データという）として用いる方法も提案されている。

【0005】 企業内の電子ドキュメント承認プロセスでは、署名を用いて本人であることを確認し、承認することが自然である。また近年、企業では CAD の利用が一般化しており、その承認のプロセスでは署名データの形状をイメージデータとして CAD データにはりつけることもできる。

【0006】

【発明が解決しようとする課題】 近年、ネットワークの発達により、このネットワーク上で種々のサービスの提供が行われるようになった。例えば、いわゆるインターネットにおいては、WWW (World Wide Web) 等によるマルチメディアタイトルの提供サービスが広く行われている。このようなサービスの提供においては、一般の銀行等におけるサービスと同様に、一定の資格者にのみアクセスを認める場合もある。このようなネットワーク上のサービスにおいても、従来のサービスと同様に、「認証」はきわめて重要な問題である。

【0007】 しかしながら、ネットワーク上で本人であるか否かの認証をする場合に、上述したバイオメトリックな認証データを用いることは一般にきわめて困難である。例えば網膜パターンや指紋、あるいは掌紋等を入力する装置を各端末に備える必要があり、また、このような物理量をネットワークを介して伝送するための仕組みも新たに必要となってしまう。

【0008】 そのため、ネットワーク上で用いられるバイオメトリックな物理量として、署名データを用いることが注目されている。この署名データは、いわゆるタブレットにより容易に入力することができ、かつ平面の 2 次元データだけではなく、筆圧の変化と署名を書くスピードもデータとしているため、本人であるか否かを確認

するための認証データとして優れた特性を有している。更に、タブレットは一般に安価に構成できるので、端末のコストも安く抑えることができるという特徴を有している。

【0009】以上述べたように、パスワードなどの認証データの他、署名データ等のバイOMETリックな認証データがネットワーク上における「認証」に利用されている。

【0010】ところが、ネットワークの拡大にともない、サービスの提供者であるアプリケーションサーバの種類が増え、かつそのサービスの提供を受けるクライアントの数もきわめて膨大なものとなっている。そのため、各アプリケーションサーバがそれぞれ別個に認証を行う際の負担が過大になってきている。

【0011】本発明は、このような課題を解決するためになされたものであり、その目的は、ネットワーク上のクライアントの認証のための照会の機能をアプリケーションサーバと独立してネットワーク上に設けることによって、アプリケーションサーバの負荷を減少させるとともに、クライアントの認証を容易に行うことが可能な認証方法を提供することである。

【0012】

【課題を解決するための手段】第1の本発明は、上記課題を解決するために、ネットワーク上のアプリケーションサーバが、そのアプリケーションの利用者の認証を行う認証方法において、前記アプリケーションサーバが前記利用者からの認証データを受信する受信工程と、前記受信工程において受信した認証データを、前記利用者の識別データと共に、照会サーバに送出する送出工程と、をまず含んでいる。

【0013】このように、本発明は、アプリケーションサーバが認証データを外部の照会サーバに送出し、照会の手続きを外部に委託している点に特徴がある。外部に照会の手続きを委託することにより、アプリケーションサーバ自体は照会のためのデータベースを備える必要がなくなる。

【0014】そして、第1の本発明は、前記照会サーバが、前記送出されてきた認証データが、前記送出されてきた識別データの利用者の認証データであるか否かを照会する照会工程と、前記照会サーバが、照会結果を前記アプリケーションサーバに返送する照会結果返送工程と、前記照会結果返送工程において返送された照会結果に基づいて、前記アプリケーションサーバが前記利用者が正当な利用者であるか否かを認証する認証工程と、を含むことを特徴とするネットワーク上の認証方法である。

【0015】このような構成によって、本発明によれば、アプリケーションサーバ自体が認証データを保持する必要がなく、且つ、認証に必要な「照会」という手続きを照会サーバに集中して担わせることが可能である。

【0016】次に、第2の本発明は、ネットワーク上のアプリケーションサーバが、そのアプリケーションの利用者の認証を行う認証方法において、前記アプリケーションサーバが、照会サーバに対し、前記利用者の識別データを送信して、前記利用者の正しい認証データをあらかじめ読み出しておくよう要求する照会準備要求工程、をまず備えている。すなわち、照会すべき認証データがまだ得られていない時点において、あらかじめ利用者が誰であるのかを照会サーバに伝えることにより、照会サーバは「正しい」認証データを予め記憶手段から読み出しておくことができるのである。これによって、照会対象である認証データが、その照会サーバに送られてきた時に迅速に、「照会」動作を行うことができる。

【0017】そのため、第2の本発明は、上に述べた工程の他に、第1の本発明と同様の以下の工程を含むものである。

【0018】すなわち、第2の本発明は、前記アプリケーションサーバが前記利用者からの認証データを受信する受信工程と、前記受信工程において受信した認証データを、前記利用者の識別データと共に、照会サーバに送出する送出工程と、前記照会サーバが、前記送出されてきた認証データが、前記送出されてきた識別データの利用者の認証データであるか否かを照会する照会工程と、前記照会サーバが、照会結果を前記アプリケーションサーバに返送する照会結果返送工程と、前記照会結果返送工程において返送された照会結果に基づいて、前記アプリケーションサーバが前記利用者が正当な利用者であるか否かを認証する認証工程と、を含むことを特徴とするネットワーク上の認証方法である。

【0019】このような構成によって、第2の本発明は、迅速な認証が行える認証方法である。

【0020】

【発明の実施の形態】以下、本発明の好適な実施の形態を、図面に基づいて説明する。

【0021】図1には、本実施の形態において、ネットワーク上に設けられているアプリケーションサーバ（Application Server）10のサービスを利用するユーザホスト（User Host）20と、ユーザホスト20の認証の際に利用される照会サーバ（Server）30とがネットワーク上に配置されている様子が示されている。

【0022】本実施の形態において特徴的なことは、ユーザホスト20の認証の際の照会動作が、アプリケーションサーバ10において行われるのではなく、アプリケーションサーバ10とは別体にネットワーク上に設けられている照会サーバ30を用いて行われていることである。このように、照会動作を行う照会サーバ30をアプリケーションサーバ10と独立にネットワーク上に設けることにより、個々のアプリケーションサーバ10はユーザホスト20の認証のための「正しい」認証データを

保持したり、照合のための機能を有する必要がなくなる。また、図 1 においてはアプリケーションサーバ 1 0 としてひとつの構成しか示されていないが、ネットワーク上に複数のアプリケーションサーバ 1 0 を設けることも好適であり、この場合にはその複数のアプリケーションサーバ 1 0 から 1 個の照合サーバ 3 0 を利用して「照合」動作を委託することができ、複数のアプリケーションサーバ 1 0 において従来重複して備えられていた認証データの照合機能を一つにまとめることができ、効率的な資源の運用が可能となる。

【0 0 2 3】また、この照合サーバ 3 0 は、ネットワーク上に複数個設けることも好適である。そして、各アプリケーションサーバ 1 0 は、認証の内容に応じて、好適な照合サーバを利用することが可能となる。例えば、認証データとして署名データが用いられる場合と、認証データとして指紋データが用いられる場合とにおいて利用する照合サーバ 3 0 を変えることも考えられる。もしくは、各利用者が自分の認証データを保持している照合サーバ 3 0 を自ら指定することも考えられよう。

【0 0 2 4】図 1 に示されているように、照合サーバ 3 0 をアプリケーションサーバ 1 0 と独立にネットワーク上に設けることにより、認証の際のメッセージのやりとりは例えば図 1 において矢印で示されるようになる。図 1 に示されているように、まず、アプリケーションサーバ 1 0 がユーザホスト 2 0 に対して認証データを送るよう要求する（図 1 において a で示される）。この認証データは、古典的にはパスワードや会員番号を利用することもできるが、バイオメトリックな物理量、例えば署名データ等を用いることが好適である。特に、上述したように、署名データは、ユーザホスト 2 0 に安価なタブレットを準備するだけで容易に入力することが可能である。

【0 0 2 5】ユーザホスト 2 0 は、a の要求に対して利用者の署名データをタブレットから入力し、利用者の識別データ（例えば会員番号や利用者名）と共にアプリケーションサーバ 1 0 に返送する（図 1 において b で示される）。アプリケーションサーバ 1 0 においては、この認証データを予め記憶しておいて「正当な」認証データと照合し、ユーザホスト 2 0 が正しい利用者であるか否かを判断するわけであるが、この照合作用を外部の照合サーバ 3 0 にいわば委託しているのである。このため、アプリケーションサーバ 1 0 はユーザホスト 2 0 から送られてきた認証データと識別データを含むメッセージを照合サーバ 3 0 に送出し、照合を依頼する（図 1 において c で示される）。

【0 0 2 6】照合サーバ 3 0 は、アプリケーションサーバ 1 0 から送られてきた認証データと識別データを含むメッセージを受信すると、その認証データが正当な認証データであるか否かを検査する。照合サーバ 3 0 はユーザホスト 2 0 が本人であると主張する識別データと、そ

の利用者の正しい認証データとをデータベースとして内部に保持している。そして、このデータベースを検索することにより、ユーザホスト 2 0 が本人であると主張する利用者についての正しい認証データ、本実施の形態においては例えば署名データ、を取り出す。そして、この取り出された認証データとアプリケーションサーバ 1 0 から送られてきた認証データとを比較・照合し、その結果をアプリケーションサーバ 1 0 に返送する（図 1 において d で示されている）。アプリケーションサーバ 1 0 は、この照合サーバ 3 0 から返送されてきた照合結果に基づいてユーザホスト 2 0 に対して認証を行うのである。

【0 0 2 7】本実施の形態においては、このように照合の動作を行う部分を、アプリケーションサーバ 1 0 と独立にネットワーク上に設けたので、複数のアプリケーションサーバ 1 0 に共通に重複して設けられていた照合機能を節約することができるとともに、認証動作の確実さを担保することが可能である。

【0 0 2 8】なお、アプリケーションサーバ 1 0 としては、インターネット上における例えば WWW サーバや、各種のデータベース等、種々のサービスを提供するサーバが考えられる。

【0 0 2 9】図 2 には、図 1 に示されているユーザホスト 2 0 やアプリケーションサーバ 1 0 及び照合サーバ 3 0 の詳細な構成を表す構成ブロック図が示されている。図 2 に示されているように、ユーザホスト 2 0 は、パーソナルコンピュータ等の端末から構成されており、インターネットに接続し、WWW サーバ 4 2 に接続するためのネットスケープ (N e t s c a p e) 5 2 を備えている。なお、本実施の形態ではネットスケープ 5 2 が用いられているが、これはモザイク (M o s a i c) 等、他の WWW ブラウザでもかまわない。ユーザホスト 2 0 はこのネットスケープ 5 2 の他に、利用者が署名データを入力するためのタブレット (T a b l e t) 5 4 を備えている。また、このタブレット 5 4 を制御し、署名データを取り出すためのタブレットドライバプログラム 5 6 が備えられている。このタブレットドライバプログラム 5 6 は、アプリケーションサーバ 1 0 から認証データを送出するように要求が来た場合に、その要求をネットスケープ 5 2 を介して受け取り、タブレット 5 4 を駆動して得られた認証データ（署名データ）をアプリケーションサーバ 1 0 に送出するのである。なお、図 1 に示されているメッセージのやりとり a、b、c、d と同一のメッセージのやりとりに対して同一の符号 a、b、c、d が図 2 にも付されている。

【0 0 3 0】アプリケーションサーバ 1 0 は、Unix マシン上に構築される場合が多い。このアプリケーションサーバ 1 0 には、図 2 に示されているようにマルチメディアタイトルを提供する WWW サーバ 4 2 と、利用者の正当性を確認するための署名照合要求プログラム 4 4

とが備えられている。照合サーバ30は、アプリケーションサーバ10と同様にUnix等のマシン上に構築されており、正当な利用者とその利用者の認証データとを登録した登録データ62を有している。そして、上記署名照合要求プログラム44から送出されてくる利用者名(利用者の識別コード)と、ユーザホスト20から送出されてきた認証データとに基づいて照合し、照合結果をアプリケーションサーバ10の署名照合要求プログラム44に返送する。

【0031】照合サーバ30の登録データ62は、本実施の形態においては、リレーショナルデータベース(以下、RDBという)によって管理されている。この登録データのRDB内の様子が図3に示されている。図3に示されているように、登録データは各正当な利用者毎に所定のデータを記録した表の形で記録されている。図に示されているように、まずフラグ(flag)は、システムの種々の状態を表すためのフラグであり、例えば削除フラグ(その利用者がシステムから削除されたか否かを表す)等として用いられる。また、システムユニークキー(SysUniq Key)は、各利用者に与えられるシステムキーであり、照合サーバ30におけるテーブル(図3に示されている)の中で唯一に定められる。また、登録タブレットタイプは、その利用者が利用するタブレットのタイプを表す。また、署名データ(Signature data)は、タブレット上で動く電子ペンの動きを表す時系列データである。この署名データには、二次元的な位置を表す情報だけではなく、筆圧やペンの速度も含まれているため、本人であるか否かの認証を精度よく行うことが可能である。

【0032】このように、照合サーバ30内部のRDBには、システムユニークキーと、署名データとが登録されているため、アプリケーションサーバ10から送出された署名データ及び利用者を表すシステムユニークキーを用いて、この送られてきた署名データが正当なものであるか否かを判断することが可能である。この判断の結果の内容については後で説明する。

【0033】本実施の形態におけるRDBにおいてはシステムユニークキーと署名データの他に、システム要求項目(System required items)とよばれる登録項目が記憶されている。図3に示されているように、システム要求項目としては、利用者の名前(Name)、利用者の誕生日(Date of birth)及び利用者の電話番号(Phone #)が登録されている。これらのシステム要求項目は、システムユニークキーの代わりに用いられるものである。すなわち、システムユニークキーは後述するようにアプリケーションサーバと照合サーバとが保持している利用者を識別するためのキーであるが、利用者は自分に与えられたシステムユニークキーを必ずしも覚えていたとは限らない。そのため、利用者が登録されている署名データを確

認したい場合等において、システムユニークキー以外で利用者を特定できる手段が存在した方が望ましい。このような場合にシステムユニークキー以外でも、利用者の名前や誕生日、そして電話番号等で利用者を識別し得るようにしたのである。

【0034】更に、本実施の形態においては、図3に示されているように、オプションフィールド(Optional fields)が設けられている。このオプションフィールドに登録されているデータはいわゆるシステム監査用のデータであり、照合サーバ30のシステム管理者が照合サーバ30の動作を管理する際に用いられる管理データである。図3に示されているように、この管理用のデータとしては、データの作成日(Creation date)、データの作成者(Creation host)、また、最終アクセス日(Last acc. date)や、最終アクセス者(Last acc. by)、その他アクセス回数(access count)や照合が失敗した回数(failure count)等、種々のデータを登録することが可能である。

【0035】また、アプリケーションサーバ10にも照合サーバ内のRDBに対応して、利用者についての情報を登録したRDBが備えられている。このアプリケーションサーバ10内のRDBに登録されている内容が図4に示されている。図4に示されているように、各種の登録データが個々の利用者毎に登録されている。図4に示されているように、まず、照合サーバ名は、その利用者が送ってきた認証データ(署名データ)がどの照合サーバによって照合されるべきか否かを表すものである。図1に示された構成図においては、照合サーバ30はひとつしか示していなかったが、ネットワーク内に複数の照合サーバが存在することも構成として可能である。例えば、各利用者は、自分が連絡を取りやすい照合サーバ30を使用したいと思う場合もあるであろうし、またアプリケーションサーバ10が各利用者毎に照合サーバを管理上の理由により変更したいと考える場合もあるであろう。

【0036】図4に示されているフラグ(flag)とシステムユニークキー(SysUniq Key)とは、図3におけるフラグ及びシステムユニークキーと同一の意味をもつ。このシステムユニークキーは、上述したように、照合サーバのRDBの中で唯一に定められているものである。換言すれば、照合サーバが異なる利用者については、同一のシステムユニークキーが割り当てられる可能性も存在する。したがって、利用者の識別は、厳密には、このシステムユニークキーと照合サーバ名とを組み合わせることにより行われることになる。アプリケーションユーザキー(App. user key)は、そのアプリケーションサーバ10の提供するサービスを受けられるか否かを表すキーである。場合によ

っては図4に示されているように追加アプリケーションユーザキー (Additional app. user key) が設定される場合もある。更に、図4に示されているように作成日 (Creation date) や最終アクセス日 (Last acc. date)、最終アクセス者 (Last acc. by)、アクセス回数 (access count)、照合が失敗した回数 (failure count) 等が図3に示されている照合サーバ30内のRDBに対応して登録されている。また、具体的な項目名は示されていないが、アプリケーションオプションフィールド (Application optional fields) にアプリケーションが利用する所定の登録データを登録することも好適である。

【0037】図5には、本実施の形態に係る照合サーバ30がサポートするプロトコルの説明図が示されている。図5に示されているように、まずプロトコル「キーの登録」においては、アプリケーションサーバ10が所定の必須項目を含むメッセージを照合サーバ30に送出する。照合サーバはこれらの必須項目をRDBに登録すると共に、システムユニークキーを生成する。このシステムユニークキーはRDBに登録されると共に、アプリケーションサーバ10に返送される。このようにして、利用者を識別するシステムユニークキーが照合サーバ30において生成される。このシステムユニークキーはアプリケーションサーバ10においてもRDB内に登録され、照合サーバ30とアプリケーションサーバ10との間でシステムユニークキーの共有がなされる。

【0038】尚、照合サーバ30において既に同一の名前、誕生日等によってシステムユニークキーが生成されている場合には、アプリケーションサーバ10に対して戻される戻り値はシステムユニークキーではなく、「error」というエラーメッセージである。

【0039】次に、プロトコル「署名データの登録」においては、アプリケーションサーバ10が、システムユニークキー、3個の署名データ、タブレットタイプ等を、照合サーバ30に送出し、「正しい」署名データを照合サーバ30内のRDBに登録させる。ここで、3個の署名データを送出するのは平均的な署名データの値を照合サーバにおいて求めて、平均的な値をRDB内に登録するためである。登録が正常に完了すれば、戻り値「ok」をアプリケーションサーバ10に返送し、既に登録が行われている場合等には「error」を戻り値として返送する。また、3個の署名データが互いに著しく異なりすぎている場合には、署名データとしての信頼性が低いため、登録は行わずに「unstable」を戻り値として返送する。

【0040】プロトコル「照合準備」においては、アプリケーションサーバ10が、システムユニークキーのみを照合サーバ30に送出し、「正しい」認証データをR

DBからキャッシュに呼び出させておく。このように、実際の認証データとの照合プロトコルに先立って、認証データを予め呼び出させておくことにより、後述するように迅速な照合処理が行えるのである。本プロトコルは、処理の迅速化のために行われるのであり、迅速化が必要でない場合には、本プロトコルを省略し、直接、後述する「照合」プロトコルを発行してもよい。尚、「正しい」認証データの呼び出しが正常に完了した場合にはメッセージIDがアプリケーションサーバ10に返送されるが、エラーが生じた場合には「error」を戻り値としてアプリケーションサーバ10に返送する。

【0041】プロトコル「照合」は、アプリケーションサーバ10がシステムユニークキー、署名データ、タブレットタイプ、及びメッセージIDを照合サーバ30に送出し、照合動作を行わせるプロトコルである。尚、メッセージIDは、先に「照合準備」プロトコルが発行されている場合にその戻り値として返送されたメッセージIDが用いられるが、「照合準備」プロトコルが発行されていない場合にはメッセージIDは省略されて送出されない。照合サーバ30は、このメッセージIDの有無によって、目的の「正しい」認証データが既にキャッシュに呼び出されているか否かを知ることができる。既に「正しい」認証データが呼び出されている場合には、そのデータと、送られてきた認証データとを比較・照合する。「正しい」認証データが呼び出されていない場合には、RDBから新たに「正しい」認証データが呼び出されて、比較・照合動作が行われる。

【0042】比較・照合の結果、両者が非常に近く正しい認証データであると判断される場合には、戻り値として「yes」がアプリケーションサーバ10に返送される。一方、送られてきた認証データが「正しい」認証データと全く異なったものである場合には戻り値として「no」を返送する。比較・照合の結果、正しい認証データであるか否かが不明な場合は、戻り値として「maybe」をアプリケーションサーバ30に返送する。このような場合の対処は、各アプリケーションサーバ10ごとに異なるであろうが、例えば、署名を利用者にやり直させる等の処置が執られることになろう。また、比較・照合をする「正しい」認証データが見つからなかった場合等においては、戻り値として「error」がアプリケーションサーバ10に返送される。

【0043】次に、実際の利用者の認証が行われる様子を図6に基づいて説明する。以下、この利用者のことをアプリケーションクライアントと称する(図6)まず、アプリケーションクライアントは、ユーザホスト20を介してアプリケーションサーバ10に対して、接続要求を行う。

【0044】これに応答してアプリケーションサーバ10は、アプリケーションクライアントに対して、アプリケーションキーの入力を要求する。これに応答して、ユ

10

20

30

40

50

ーザホスト 20 の表示装置上にはアプリケーションキーの入力を促すプロンプトが表示される。

【0045】アプリケーションクライアントがユーザホスト 20 において所定のキーを入力すると、そのデータがアプリケーションサーバ 10 に送出される。

【0046】アプリケーションサーバ 10 は、このキーデータを受信すると、署名データの照合準備の要求を照合サーバ 30 に送出する。この照合準備要求は、上述したように処理の迅速化のために行うものであり、省略することも可能である。

【0047】照合サーバ 30 は照合準備要求を受信すると、上述したように、認証データを RDB から読み出し、キャッシュに記憶させると共にアプリケーションサーバ 10 に対してメッセージ ID、暗号キーを送出する。暗号キーは通信データの暗号化に用いられるキーであり、暗号化が必要なければ送らなくともよい。

【0048】上記メッセージ ID 等を受信したアプリケーションサーバ 10 は、アプリケーションクライアントに署名を入力させるため、署名入力要求を出力する。

【0049】この署名入力要求に応じてサーバホスト 20 においては署名入力プログラムが起動する。このプログラムの起動に基づき、アプリケーションクライアントはユーザホスト 20 に備えられているタブレットを用いて署名を行う。ユーザホスト 20 は、タブレットから入力された署名データをアプリケーションサーバ 10 に送信する。

【0050】アプリケーションサーバ 10 は受信した署名データを含んだ照合要求を照合サーバ 30 に対して発行する。

【0051】照合サーバ 30 は、照合要求に基づき、照合を行い、その結果をアプリケーションサーバ 10 に返送する。

【0052】アプリケーションサーバ 10 は照合結果に基づき、認証を行う。このときの動作は各アプリケーションサーバ 10 により異なるが、照合結果が YES の場合には「認証」を与えることになり、それ以外の場合に

は「認証」を与えない、若しくは署名をやり直させることになる。

【0053】以上述べたように、本実施の形態によれば、認証の際に行われる照合動作を外部の照合サーバに委託したので、アプリケーションサーバの負荷を減らすと共に照合動作の簡明化を図ることができる。

【0054】

【発明の効果】以上述べたように、第 1 の本発明によれば、ネットワーク上における利用者の認証をアプリケーションサーバ以外の照合サーバに行わせたので、アプリケーションサーバの構成が簡単になり、複数のアプリケーションが同一の照合サーバを利用することで、ネットワーク上の資源をより効率的に利用することができるという効果を奏する。

【0055】また、第 2 の本発明によれば、照合に先立って、照合準備要求工程で、認証データを予め呼び出させておいたので、迅速な照合を行うことが可能である。

【図面の簡単な説明】

【図 1】 本発明の実施の形態の構成を表す構成図である。

【図 2】 本発明の実施の形態の構成の詳細を表す説明図である。

【図 3】 照合サーバ内の RDB の構成を表す説明図である。

【図 4】 アプリケーションサーバ内の RDB の構成を表す説明図である。

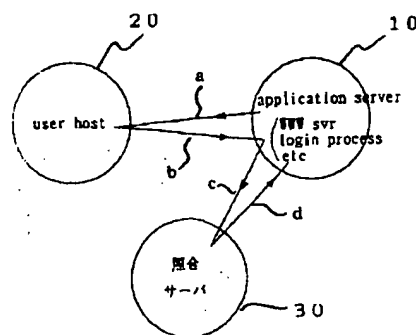
【図 5】 照合サーバがサポートするプロトコルを表す説明図である。

【図 6】 本実施の形態におけるメッセージの交換を表す説明図である。

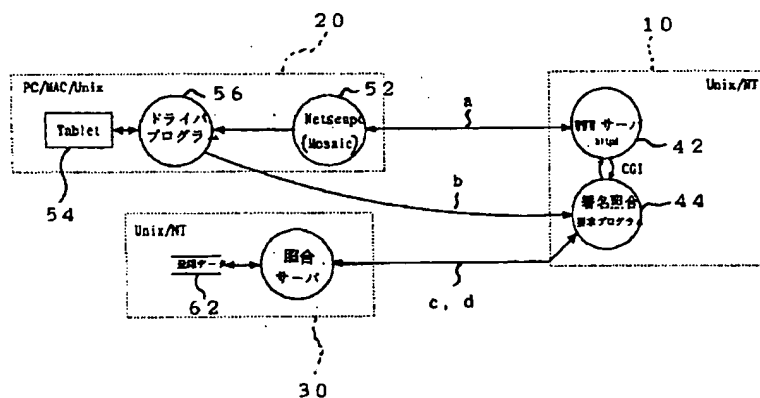
【符号の説明】

10 アプリケーションサーバ、20 ユーザホスト、30 照合サーバ、42 WWWサーバ、44 署名照合要求プログラム、52 ネットスケープ、54 タブレット、56 タブレットドライバプログラム、62 登録データ。

【図 1】



【図 2】



【图 3】

			flag	System required items
			Sys Uniq Key	
			全角アルファベット	
			Signature data	
			Name	
			Date of birth	Optional fields
			Phone #	
			Creation date	
			Creation host	
			Last acc. date	
			Last acc. by	
			Access count	
			failure count	

【図 4】

[illegible]

【図5】

照合サーバプロトコル

リクエストに共通なデータ: データバージョン、番号タイプ、圧縮タイプ

リクエスト	リクエストに依存したデータ項目	返り値	説明
キーの登録	必須項目(Name, BirthDate, Phone)	System uniq key error	照合サーバにシステム必須項目を与えて、システムユニークキー(登録キー)を得る
署名データの登録	System uniq key, 署名データ x3 タブレットタイプ	ok/error: Unstable	登録キーと共に複数の登録用署名データを送信し、署名の登録をする
照合	System uniq key, 署名データ、 タブレットタイプ メッセージID	Yes No Maybe error	登録キーとともに照合される署名データを送信して照合要求をする 照合準備要求をした後であればメッセージIDを付ける
照合準備	System uniq key	error メッセージID、暗号キ	照合に先立って登録キーとともに署名データの読みだし要求をする。 戻されるメッセージIDを使い照合することもできる

【図6】

